

# Platform

大口を開けて待つ。

新宿の中に

予測不能な世界が

station

- VRChat : Resting Reamins
- cluster : チキンASMR
- NeosVR : Torazo's World
- Real.W : 新宿・歌舞伎町

# Platform Vol.3 contents

Gravure: ORGANISM	.....	4
Resting Remains VRChat	.....	14
チキンASMR cluster	.....	20
Torazo's Worlds NeosVR	.....	26
新宿・歌舞伎町 Real.W	.....	34
あとがき	.....	40

第3号のテーマは「混沌」。

混沌というのは、全てが未分化で無秩序な状態のことだ。順序が整っておらず、形が定まっておらず、人を不安にさせる。

だが、この膨大な無秩序はきっと可能性なのだ。混沌の渦の中から分化し、秩序が生まれ、カタチが定まっていく。その行為を「創造」とよぶ。

混沌の中から創造された今号が、また新たな混沌を産むことを願おう。

編集長

◀ To the next PLATFORM.



世界には、色んな町がある。  
その町ひとつひとつに、駅がある。

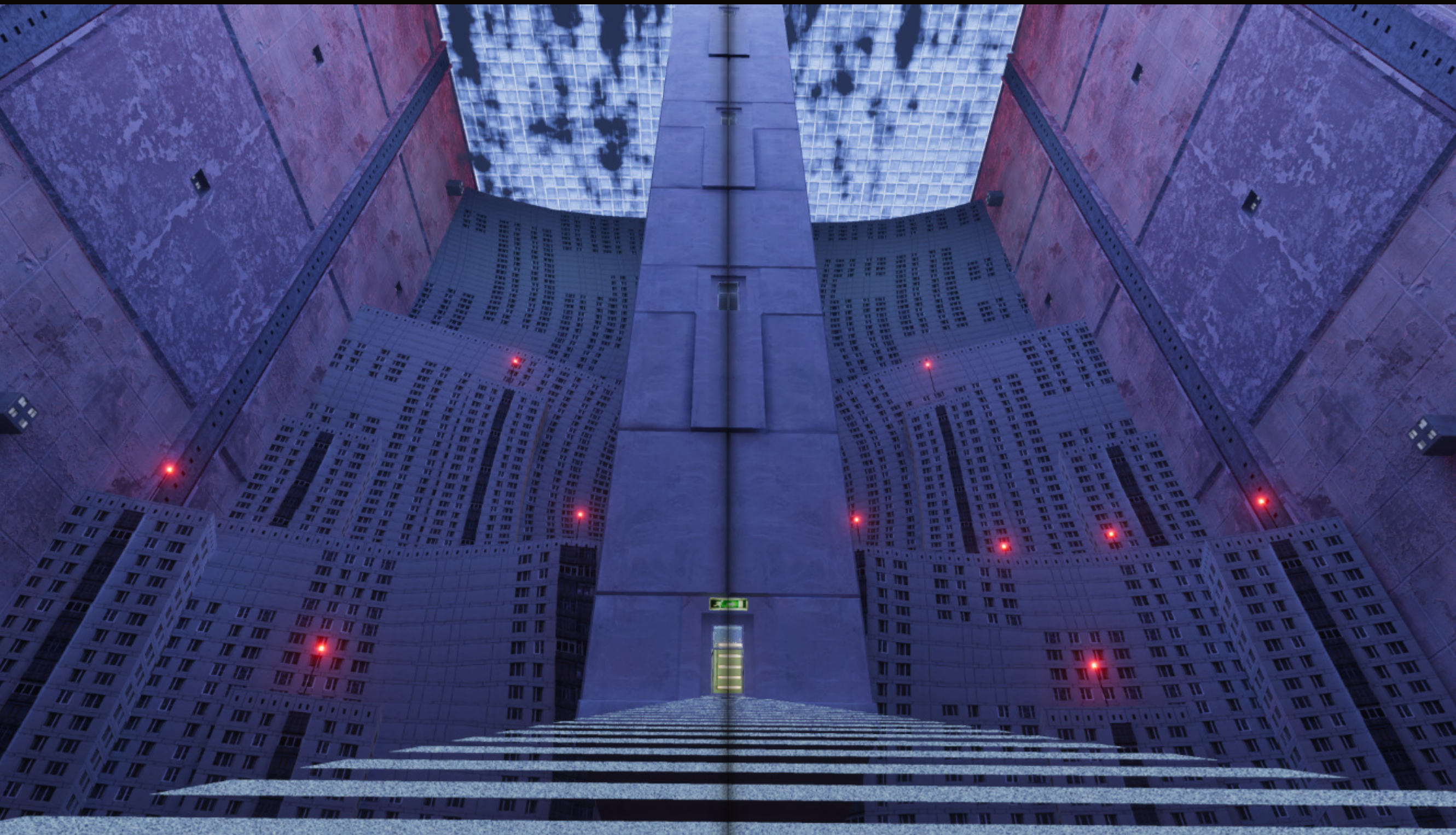
どの町も駅もそれぞれ違っていて、  
違った人たちがいて、  
そこを訪れた僕たちが抱く思いも、  
きっと違うのだろう。  
……VRでも、Real Worldでも。

今はまだ離れ離れの「駅」を、「町」を、  
あなたへ繋ぐ線路でありたい。

——それが「Platform」



— Welcome home.



...to the world of CHAOS.



# ORGANISMS

# ORGANISAM





# ORGANISM

# ORGANISIM



World: **ORGANISM** Created by DrMorro

徐々に慣れてきた私の目に映り込んできたのは、はらはらと霏もやのような灰が舞い散る殺風景な世界だった。

# 眠ル混沌

## Resting Remains

VRCHAT

写真／みくにき

形を保つことを止めた建造物が数点、明度の低いこの世界に、無秩序に放棄されている。耳には音数の少ないピアノと、揺れるチェロの音と、誰かの（もしかすると私自身のものなのかもしれない）後悔を飲み下すかのような微かな吐息だけが聞こえる。ワールド「Resting Remains」。

安らぐ遺物、といったところなのだろうか。降り続く灰と、腰辺りの高さまで伸びた雑草達の笹鳴り以外が全て静止したかのようなこの世界には、時間すらも灰土かんどの下で眠っているかのように感じる。

一先ず右手の彼方へと砂漠のような道無き道を踏みしめ歩み始める。少しすると見えてきたのは変圧器、だろうか。近寄ってみると、過去に何かを制御していたであろう、人の背丈ほどの高さがある機器の類が寄り添うように灰土かんどに沈んでいた。彼らも今は眠っているのだろうか。機械音一つ上げない金属製の肌にはもう熱は宿っていないようだった。



彼らの肩口の先に9本の小さな光が見える。少し歩を進めるとそれは、天から糸を垂らすように備え付けられた蛍光灯の明かりであることが分かった。誰かを照らすわけでもなく、彼らはただ自身の光で糸の影を傍らの勾配へ焼き付けていた。異質で、異常で、背に寒気が走るような静けさの中で、不思議なことではあるが、何故かこの寂しい光に幾ばくかの愛おしさを感じた。昔、父を迎えに向かった夜の空港の、人気の無いターミナルに落ちる電光でも想起したのだろうか。

踵を返し、足早に電光の許を離れる。降り続ける灰を払いながらただ、歩む。人は前に進む生き物だから、今という時間を前に進める生き物だからなどと、とにかく何か理由をつけて一歩でも先に進みたいと思った。薄気味の悪さから逃れるためだろうか。いや、違う。この世界

に、得も言えぬ安心感と心地良さを覚えつつある自分に気が付いたからだ。

草臥れて沈むモニユメントに沿って歩いていると遙かに聳える枯れた木々達が現れた。薄い霧を揺らす木漏れ日に腕を引かれ木立に寄る。厳然でいて、森閑。しかしどこか憂いと懐かしみを覚えてしまふそれは、昔、旧友とよく登った実家

近くの小さな山の静けさに似ていた。足が動く。木立の先に忘れていた誰かの温もりがあるかのように感じて、居ても立っても居られず、足が灰土を蹴っていく。しかしその先には、切り立った勾配と打ち捨てられた人の背丈ほどのカプセルが転がっていただけだった。

ぼんやりと立ち尽くしていた私はふと、何かに誘われるかのようにならぬ目を落し、ワールドの説明文に目を落とす。そこには簡素な英文が書かれていた。

苦しくなるほどに、人は無秩序の世界から光を求めて前に進んでしまう。夜明けを目指してしまふ。目指すようにプログラムされているのかもしれない。そうして人々の歩んだ後には膨大な過去が降り積もっている。過去はいつまでも我々を見守っている。彼らに顔向けできるように、我々は歩を進め続けなければならぬ。私は振り返り、再び歩み出すために。微笑むかのように見える淡い光景を背に、私は開闢を求めてこの世界を後にした。

(文：ヤマノケ)

“remains of visions and memories rest here, they won't forget you.”

(景色と記憶の残滓はここに眠る、彼らは貴方を忘れはしない)

そうか、この世界は、そしてここにいる彼らは、きつと私の、私たちの歩んできた過去なのだ。懐かしいあの場所や、今はもう朧げにしか覚えていないあの人の顔や、穴が空いて捨てた靴下、大事にしていた玩具、押し入れにしまった落書きまみれの教科書。たくさん見つけて、たくさん作って、たくさん壊して、たくさん打ち捨てて、受け取って、受け継いで、そうして私が、私たちが生み落としていった彼らが眠る場所なのだ。今、ここで立ち尽くしているこの私を彼らは恨んでいるだろうか、怒っているのだろうか、それとも愛おしく思ってくれているのだろうか。

メニューを閉じて、威儀を正し、小さく一礼する。世界は何も答えない。上げた目線の先に灰が降る。寂れた木漏れ日の先で彼らが小さく手を振ったように感じた。

Resting Remains (作：Karl Kroenen)

 ACCESS in VRChat

To the next PLATFORM.

全ては私の無邪気な一言が始まりだった。「clusterのカオスなワールドに案内して欲しい!」と。  
 著者もVRでの活動を始めて約二年、VRChatを始め、有名どころであるカオスなワールドについては、ある程度知っているつもりだ。ところがclusterにおけるカオスなワールドについては無知である。

よってclusterに詳しい私の知人、ルナ紅音氏に、カオスなワールドへの案内をお願い申し上げた。(ルナ氏にはこの場をお借りして、感謝を申し上げます) 彼女は私の図々しい願

## 恐怖の カオス

いを喜んで引き受けて下さった。彼女が即答したことで、私の期待が高まる。だがこの時の私には、想像を絶する恐怖が待ち構えていることを知る由もなかった。

さて、案内していただく当日、ルナ氏は「チキンASMRに行きましょう」と言った。ワールドのサムネイルになっていく、気の抜けた表情の黄色い鳥はよく知っている。腹を押すとマヌケな音が鳴るおもちゃ、びっくりチキンだ。

なるほど、あの笑える音を存分に味わって、皆で大爆笑ワールドか。耳かきやドライヤーの音を楽しむASMRワールドはいくつか知っている、それと似たようなものか。……なんて今にして思えば、浅はかな考えに過ぎなかった。

いざ彼女と共にワールドに降り立つと、どこからか響いてきたのは神聖なコーラス。美しいステンドグラスからは、白い光が差し込む。円柱に挟まれるように、赤いロングカーペットが敷かれ、最奥の玉座に鎮座するのは一体のチキン。

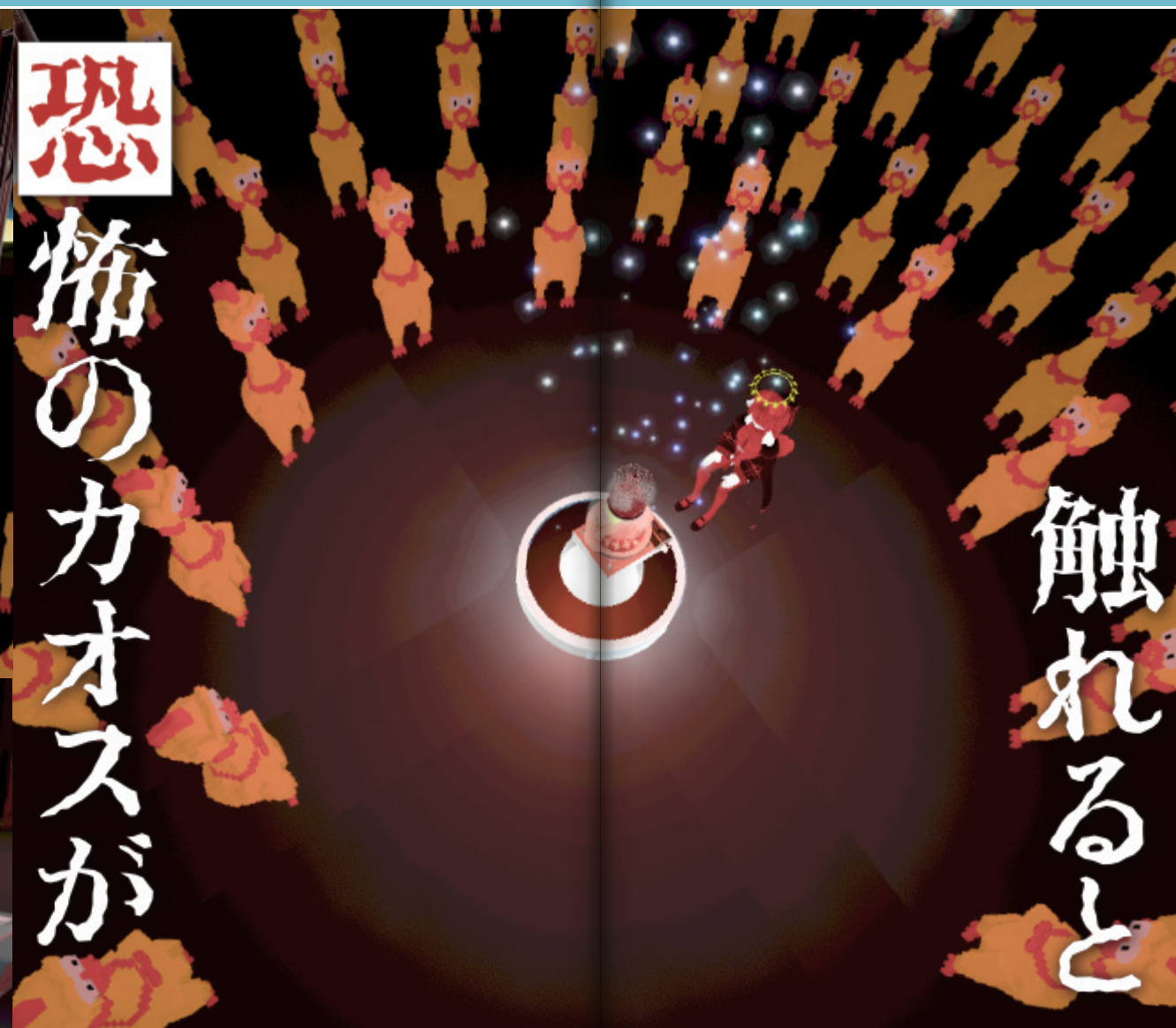


じゃあ、いまらか。





始まる



恐  
怖の  
カオスが

触れると



びつくり  
しちゃう  
手キンに



カオスとは対極に位置する、神聖にして壮麗たる空間。しかし私は、本能で理解ってしまった。これは嵐の前の静けさだと。ラスボス戦の前にある、場違いに安全な最後のセーブポイントのような場所だと。最悪の時間を迎える寸前のように、心臓の鼓動が早くなる。

私とルナ氏は鎮座するチキン様に謁見を求めた。「いらっしやい。うん、「また」なんだ。済まない」と、チキン様は某巨大掲示板で有名なコピペ文を喋り出す。そうだ。このコピペ文は、この後に起こる出来事について謝罪する際の定型文。裏を返せば、ここからが本当の地獄だという訳だ。

やがてチキン様が「じゃあ、いこうか」と語りを終える。ルナ氏に促されるまま、私は固唾を飲んでチキン様に触れた、その直後――

「うんっしや〜ん」

「メタバースへようこむ」

「……歓迎……」

「Welcome!!!」

星が消えた宇宙のような闇に浮かび上がるのは、インターネット黎明期のホームページを思わせる、クソダサ3Dフォントによる歓迎の文字列。そう遠くない場所で巨人もとい巨チキンたちが、戦列を組んで私を睨む。恐れ多くも、立ち尽くしている場合ではないとすぐに悟る。あろうことか、私は鳥籠の中に囚われていたのだ。ルナ氏も別の鳥籠に囚われていた。お互いが空中に浮かぶ鳥籠の中に。まさか、人間が鶏肉を食っていた報いを受けるように、今度は我々が食われる側になるというのか？

視線を下に向けたとき、その予感はお的中した。できれば的中させたくなかった。等身大のチキンどもが、地上で輪を組んでいる。磔にされる代わりに、鍋で煮られる生贄のチキンを取り囲むように。邪悪で陰湿な儀式そのものだった。このままでは、私も同じ末路を辿る。

ふと、鳥籠の中央に、ミニサイズの鳥籠が設置されていることに気づく。これが脱出口かもしれない。淡い期待を抱いて触れる。致命的なミスだった。



# 迫り来る恐怖のチキンたち

私は生贄に捧げられた。地上にテレポートされたのだ。チキンどもの輪の中央へと。鍋で煮られる一体のチキンと向き合うように。「おまえもびっくりチキンにならないか？」とでも言いたげに、鍋で煮られるチキンは視線で私を射貫く。さながら、腐敗した豚の頭部を依り代にした蠅の王と対峙する嫌悪感、そして恐怖。



周囲からは、無数のチキンが例の間抜けな音を絶えず発していた。底知れぬ闇に、チキンの鳴き声が延々と木霊する。邪神を崇める呪文のように思われた。気が狂いそうだった。

その時、初めて私は思い知る。チキンASMRの意味を。ルナ氏も一足遅れて地上に降り立つ。すかさず私は彼女に「脱出しよう！」と懇願した。そうして共に、虚な視線で呪文を唱えるチキンどもの間を縫って走る。輪の外には無数のポータルがあって、その内一つへと駆け込んだ。辛うじてSAN値が尽きる前に脱出、急死に一生を得る。

逃げ込んだ先は、不穏なBGMが鳴り響くホラーワールドのエントランス。それでもチキンどもの洗脳呪文に比べれば、むしろそよ風のように心地良く思える。

落ち着かせている私に、ルナ氏が後味が悪くなる事実を告げた。なんとこのチキンASMRに繋がるポータルは、cluster中に点在しているらしい。ホラーワールドは勿論、平和で美しいワールドさえも。

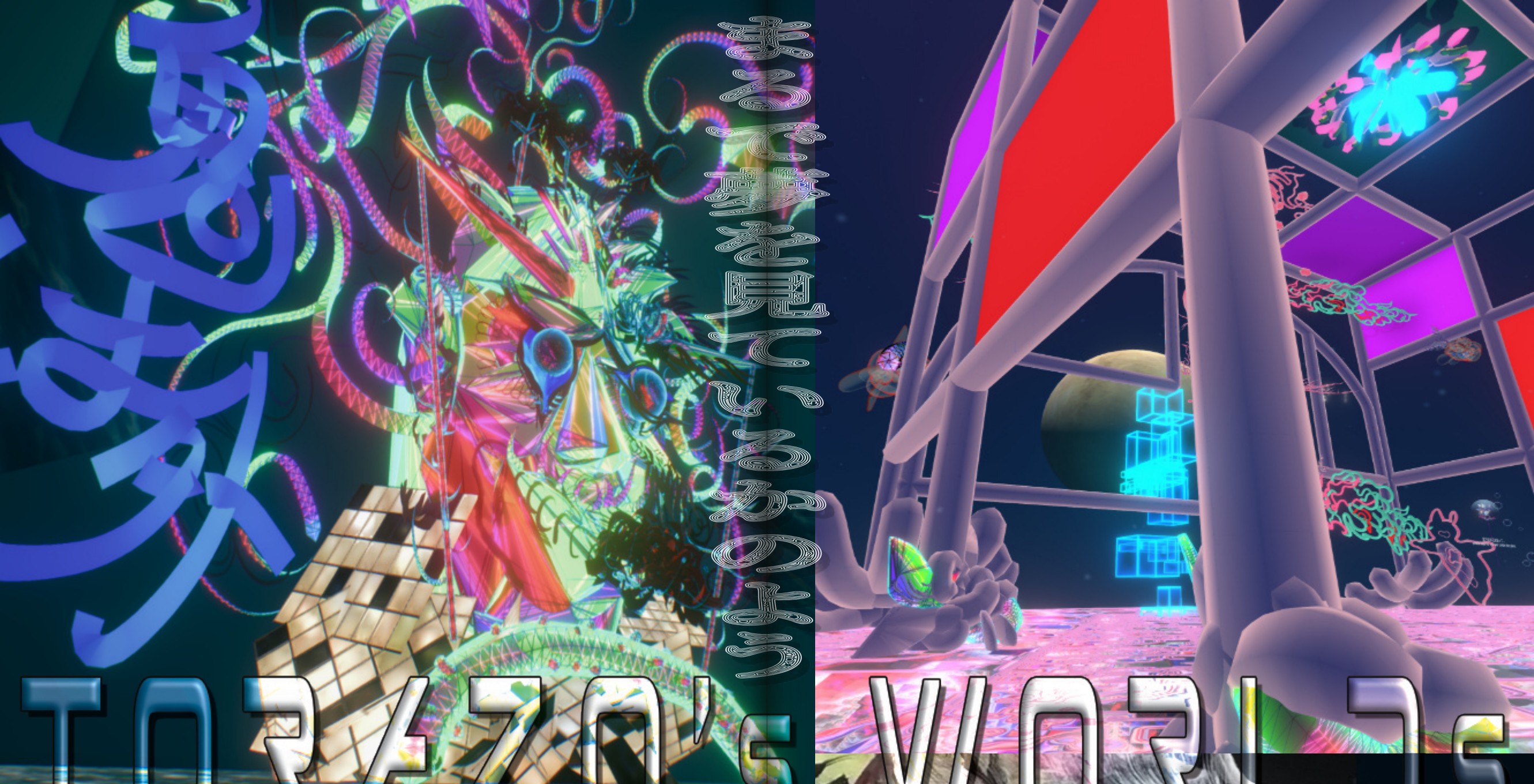
チキンASMR。それはcluster中のカオスが流れ着く最終地点。あなたの足元に這い寄る混沌、その最深部に他ならない。

(文：sun)

# あなたはもう逃げられない

チキンASMR (作：ほびわん)

ACCESS in cluster



デジタル空間の未来

# TORAZO'S WORLDS



Torazo



「まるで夢を見ているかのよう」

カオスを形容する慣用句の一つだ。それは物理法則を無視した浮遊感や、秩序さを内包する。そんな夢の世界を、いつまでも見たいと思ったことはないだろうか？

VRアーティストのTorazo氏の作品は、そんな夢のような世界に貴方を誘う。今回は彼女が創ったワールドを三つ紹介しよう。

まずは「Maliruv Dum」…チェコ語で「絵描きの工房」という意味のワールド。海に浮かんだ小さな島に降りたったら、ソファーに腰掛けてみよう。海面から顔を出す、口を大きく開けた鬼の顔を模した巨大な門が、小刻みに震え続けている様が見える。これは「笑う門には福来る」の諺から来ている。

Torazo氏は仰った。「家族の影響で、おどろおどろしい鬼が出る昔話やホラー映画をよく見ていた。それにより、世間一般で言うグロイもの、キモイもの、あの世を思わせるものや爬虫類の造形などが好きになった。それが私にとって、幸せな夢になっていく」。言わば笑う鬼は、Torazo氏が思い浮かべる夢によ



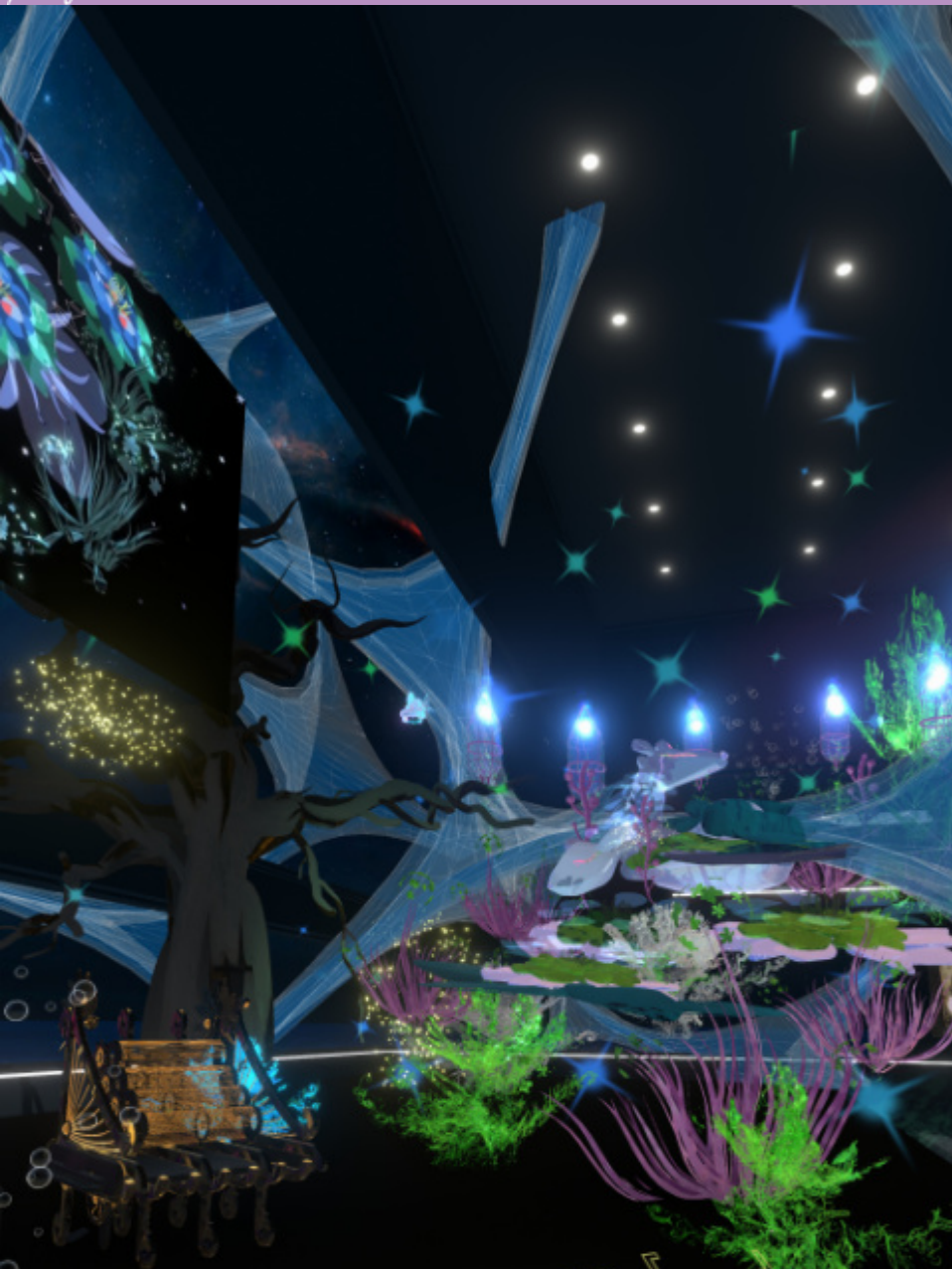
って、訪れた人を幸せにしたい想いの結晶なのだ。

ところでNeosVRでは、基本操作で空中を飛べる。マウスならホイールボタンを、Meta (Oculus) QuestならばBボタンを押して、移動方法を選択し、フライかノックリップを選ぼう。フワッと浮き上がることに成功したら、空中を遊泳する七色の海亀に近づく。背中をマウスでクリック、Meta&Oculusならトリガーを引いて、「ヘアンカーに入る」を選べば海亀と一緒に遊泳できる。視界の果てにある、吸い込まれるようなフ

ラクトアルアートをぼんやり眺めれば、きつと嫌な現実を忘れられるはず。ノックリップの話が出たのでそれを活かしたVRアートも紹介しよう。

二つ目のワールドは「Blue-relax」…憩いの場所として活用して欲しいという願いが、その名前に籠められている。原始的な生物が海中を揺蕩う様子は、創世記のような雰囲気を目指したこのこと。生命が芽吹いた最初の時代、それもまた一つのカオスであろう。

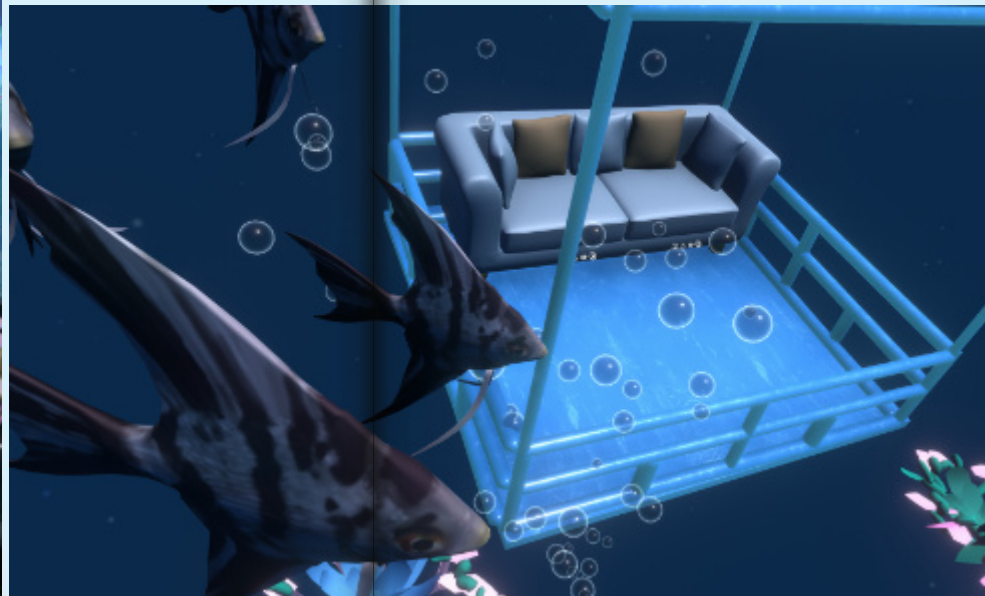
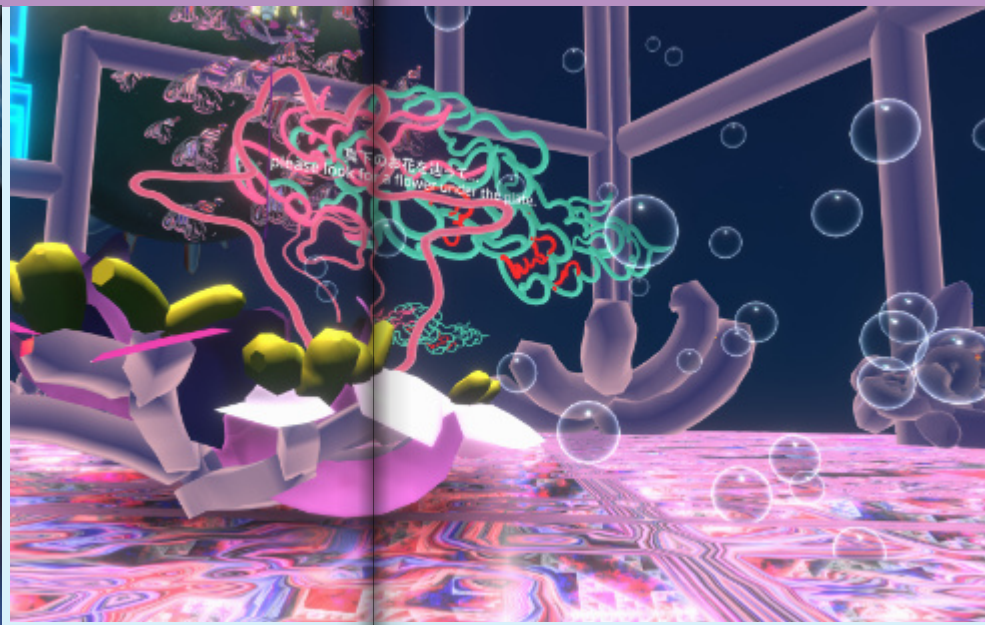




Ambientflow × Torazo

Year: 2022  
 “体内の音が波のよそに押し寄せる”  
 The sound inside the body surges like a wave.  
 “体は羽がある水亀 頭が鹿のよきなそんな生き物がほっとひと息するために降りた音の空間”  
 The body is like a water turtle with wings, and the head is like a deer.  
 This is a space of sound where such a creature descended to take a breather.

# Torazo Solo Exhibition 2022



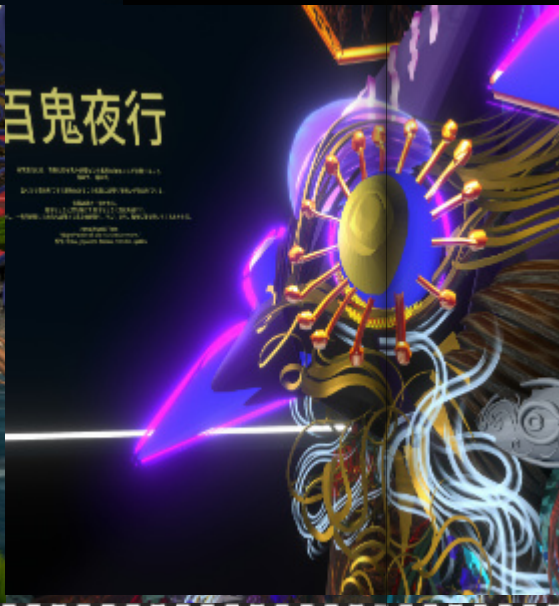
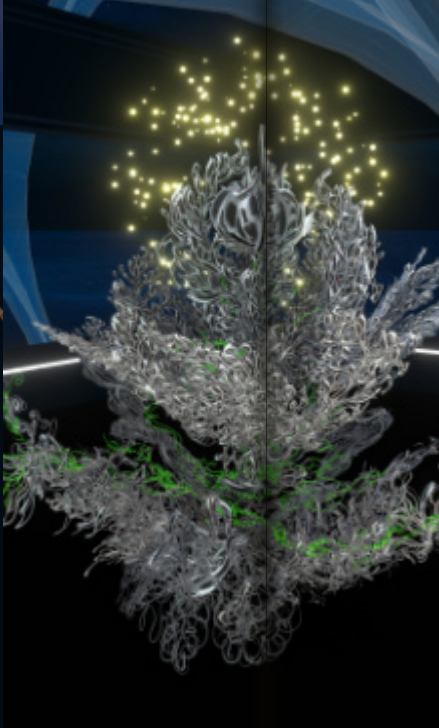
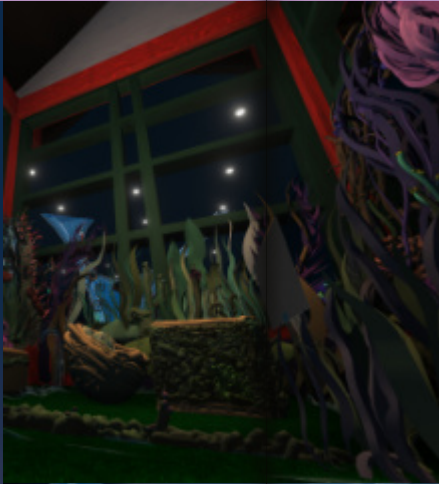
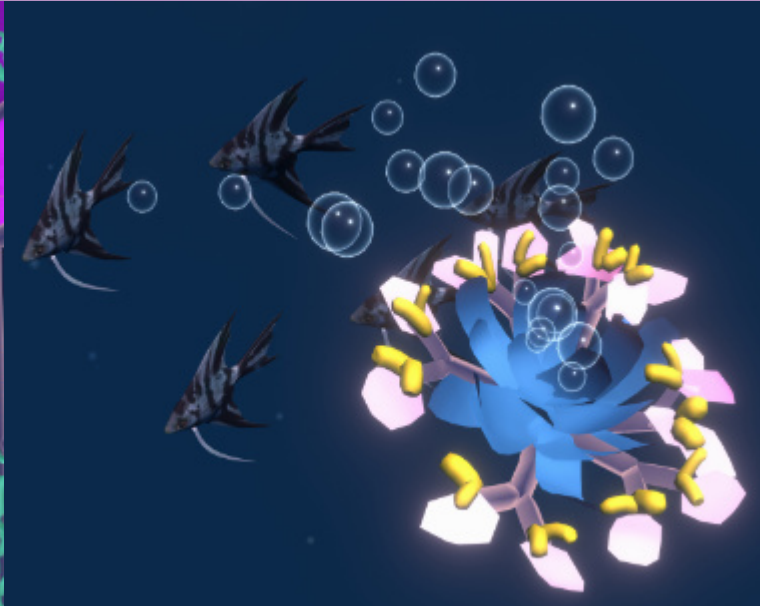
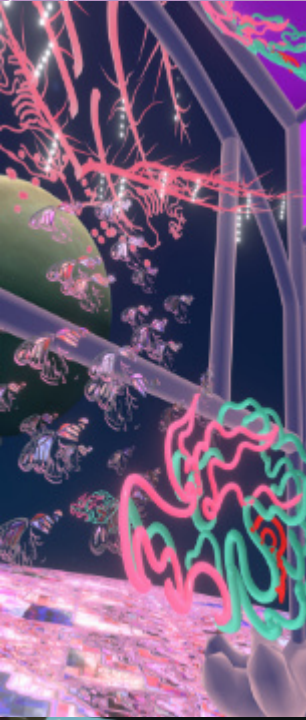
さて本題だが、中央のクリオネには「真下のお花を辿って…」と書かれている。先程と同様に、移動方法をノックリップに選択（フライでは駄目）。このモードでは壁や床をすり抜けて移動できるから、真下にあるお花を視線に捉えて、深く海に沈んでみよう。浮き上がる泡や幻想的な花々に、どこか母性のような安心感を覚える内に——小さな秘密の部屋に辿り着く。

ここにもあるソファーに座ってブックと、安心感を齎す環境音に包まれながら、好きな動画などをゆっくり観るには打ってつけた。



最後に紹介するのは“Torazo Solo Exhibition 2022”つまり彼女の個展だ。百鬼夜行というワールドテーマに違わず、エントランスから奇怪ながらも美しい造形の数々が出迎えてくれる。





メインホールに展示されているのは、音楽パフォーマンス(くう)氏との合作、『』。「作品名はなく、自由にタイトルをつけることができず」とのこと。S.氏が奏でる『星-Hoshi-』は、静かに明滅するような繊細で幻想的なピアノの旋律。私はこの旋律を、VRの様々な場所で聴いたことがある。あらゆるシーンに合わせて、想起させる感情を千変万化させる、真っ白なキャンパスのような不思議な曲だ。Torazo氏が受けたインスピレーションからは、まだ見ぬ生命が羽休めするのに相応しい、草木に溢れたへ音の空間が生まれた。

「Torazo Solo Exhibition 2022は未完成のミュージアムだが、完成することが完璧だとは思っていない」と、Torazo氏は語った。もしかしたら、彼女の作品にインスピレーションを受けて、カオスから新たな芸術を、創り出すのは貴方かも知れない。

「Torazo氏はもともとTilt Brush (チルトブラシ)というVRお絵描きアプリを使っていた。そのアプリを使うコミュニティ内の先輩たちに誘われ、cluster GAMEJAMや NeosVRのMMCなどといったイベントに参加したのが、VR内で作品を展示するキッカケになったという。NeosVRの機能でTilt Brushを掛け合わせるなど、Torazo氏は日々新たな芸術の形を創っている。」

「文..sun」

Worlds created by **Torazo**  
 Available in **NeosVR**

- 🌐 Maliruv Dum
- 🌐 Blue -relax-
- 🌐 Torazo Solo Exhibition 2022



新宿

# 歌舞伎町

## 「混沌」と 「秩序」の 環を歩く

「混沌」をことさらに強調するものが嫌いだ。例えば、サイケデリックな色使いとめっちゃくちゃな音声をめっちゃくちゃに鳴らしてみたりして、

あるいは明らかに意味がない筋立てで話をしたりして、「混沌」を演出すること。これを私は「養殖もの」と呼んでいる。

真の「混沌」とは、ひとつひとつの要素は真剣に、「秩序」を求めているのに、全体で見ると時にはそれらが全くかみ合わず、結果的に無秩序になっていくものことだと思ふ。例えば、昔台湾で見た夜の市場。一軒一軒の店は、屋台は、美味しい料理を作る真摯な店だが、それらが大量に集まってしまえば急速に無秩序になり、「混沌」が生じて独特の気配を生じさせる。これこそが「天然もの」である。

そう、「天然もの」の「混沌」は街の中にある。例えば、今私が立っている新宿歌舞伎町に。

私は歌舞伎町を「前」と「後ろ」と勝手に二つの領域に区分している。「前」は有名な入り口の門からゴジラのホテルと言われる東宝のホテルがある周囲のことだ。昨今、不良少年少女で有名な「トー横」もこの領域だ。





# 知れぬ底

# 混沌の中

新宿

「前」における「混沌」はその街並みにある。一軒一軒は真剣に、酒を提供し、性を提供しようとしているのだが、それらがまじりあった結果、風俗の無料案内所と居酒屋チェーンが隣接し、アジア系の飲食店と意外と昔からありそうな日本料理の居酒屋が隣接することになっている。

だが歌舞伎町の「混沌」、その神髓はゴジラホテルの奥の方、つまり私が「後ろ」とよぶ領域にこそある。横一線に引かれた道路が領域を区分するこの道路を越えればそこはラブホテル街で、派手な概観と目立つ「休憩●●●●円！」の大きな看板があたりこちらにある。この「後ろ」における「混沌」は、そこを歩くだろう人に・・・多くは「そういう」男女に、頭の片隅で求められてもいる。

ラブホテル街であるから、大部分の男女は「そういうこと」を目的にこの周辺を歩いている。男性も女性も、タイミングを計りながら雑談をしつつ歩いている様子が、聞くとはなしに聞こえてくる声からわかる。妙な緊張感があり、どちらが先に「無秩序」な性の解放を仕掛けるかの間合いを計っている。さながら、達人同士のにらみ合いのようだ。

今、前にいる男女が、女性側から「仕掛け」、ついに90分数千円の宿にはいった。「秩序」を文字通り脱ぎ捨て、ついに「無秩序」へと移行する。この間合いを計る会話、達人同士のにらみ合いがあちこちで起るのが「後ろ」だ。

私はそんな妙にひりついた空気と「秩序」が「無秩序」へと転換する一瞬が交錯する「後ろ」が大好きなのだ。

そんな歌舞伎町の「後ろ」も抜け、JR高田馬場駅の方まで歩くことにする。30分くらいはかかるだろうか。秋の涼しさのおかげで歩くことは苦にならない。

西武新宿線の線路に沿って歩いてしばらくすると、エスニックな香りが漂ってくるのを感じ、若い女性が沢山いることが分ければ、そこはもう新大久保、コリアンタウンだ。日本国内にあり、日本人がいて、聞こえてくる言語は日本語であるはずなの



# 秩序へ



# 混沌から

高田馬場

新大久保

人々は自分の生活を送り、「混沌」の正反対の中に生きる。

さらに歩いていくと、反対側から大声で話ながら歩く青年の集団がやってきた。ああ、どうやら日本で一番有名な校歌を持つ大学の学生であるようだ。その大学からは徒歩20分といったところか。平穏な「秩序」の領域は思ったよりも狭いようだ。

しかし、こうやって街を歩いてみれば、この街は、大きな「混沌」が渦巻く場所と、その谷間に「秩序」に満たされた平穏な空間があることに気が付く。

そうか。

「秩序」から欲望渦巻く「混沌」へ、「混沌」から日常の「秩序」へ。人々はこの円環の中に日々の生活を送っているのか。

さて、JR高田馬場駅に到着した。ここはもちろん「混沌」の場。そしてさらに大きな「混沌」へ繋がる円環、山手線に乗って、私は次にどの「混沌」に向かおうか。

(文…ニッソ編集長)

に、明らかに「違う」空気が漂っている。なんとというか、韓国の飛び地がここにあるかのようだ。戦前、欧米諸国や日本が海外の国家に置いた租界というの、外国人街とは方向性は正反対であるが、案外こういう雰囲気なのかもしれない。

そんな「租界」も完全ではなく、コリアンタウンの中心に、古い日本式の家屋—といっても所謂日本家屋ではなく昭和中期に建てられたようなものである—が残っている。これも私のような外部者にとっては「混沌」である。日本の一部に韓国の「租界」があり、本来あっておかしくない日本式の廃屋が反対に異質なものとして、食い込むように存在している。たった一軒の廃屋が、コリアンタウンに「混沌」をもたらしている。

「租界」を抜けて高田馬場方面へ歩いて行くと、この道には「下」があり、陸橋になっている箇所がある。橋の上から「下」を見ると、どうやら奥の方に小学校か何かがあることがわかる。10分前の新大久保の喧噪も、50分前の歌舞伎町での間合いを計る会話からも離れて、ここには児童が生活できる「秩序」がある。



# Gravure : ORGANISM

station

撮影 : Tokikaze



VR CHAT

# Resting Remains

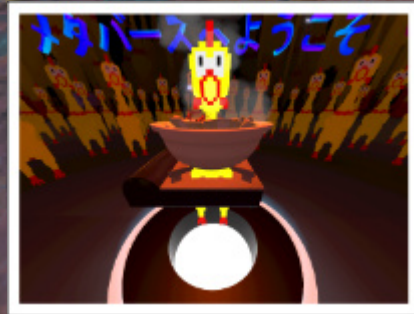
執筆 : ヤマノケ  
撮影 : みくにき



cluster

# チキンASMR

執筆&撮影  
: sun



NEOS

# Torazo's World

執筆 : sun  
撮影 : オージュ



# 新宿・歌舞伎町

執筆&撮影 : ニツソちゃん



**ニツソちゃん**  
編集長

混沌の渦から出られましたか？まだぼーっとしますか？頭を振って顔を拭いて。お手持ちの切符はそのまま。次の駅は「冬」です。

**思惟かね**  
編集/デザイン

今号は創作意欲を掻き立てる「濃い」ワールドばかりで、編集が楽しかったですね！やはりカオスこそは創造の源です。

**SUN**  
ライター

両親が家に来たとき、母にはせきぐちあいみさんの個展を、父にはフェアリーに乗れるワールドに案内して楽しんで貰いました。特別な活動をしなくても、VRは楽しいのです。

**みくにき**  
カメラマン

我が国は、クリスマスチキン派、シャケを食べ派、栗スマス派の3つに分かれ、混沌を極めていた……。

**わく**  
ライター/校正

「混沌」という一つの切り口で、ここまで方向性の異なるワールドがあることを知れたのが楽しかったです。

**ヤマノケ**  
ライター

なかなか高カロリーな巻となりましたね……読後のSAN値チェックはお忘れなく……

**オージュ**  
カメラマン

最近友人がVRを始めてくれて、どこのワールドに連れて行こうか考えてわくわくしている日々です。

**Tokikaze**  
カメラマン

今年の師走はまさに”混沌”でした。カオスを眺めるのは楽しくても、カオスの中で生きるのは思いのほか地獄です。

**Nag**  
校正

混沌に遭ったその息遣いまで文字起こした……そんな切迫感に満ちた本号もまた、誰かの「異界駅」の一つとなりますことを。

**燕谷古雅**  
編集/デザイン

メンバーに入ってから、いきなり「カオス」というお題がつけられた時は頭の中が真っ白になりました。平沢進のPVのイメージしか思い浮かびません。

STAFF 編集長 | Editor Chief  
ニツソちゃん

誌面デザイン | Graphic Design  
思惟かね  
燕谷古雅

執筆 | Writer  
ヤマノケ  
sun  
ニツソちゃん

校正 | Proofreading  
Nag

撮影 | Photographer  
Tokikaze  
みくにき  
sun  
オージュ  
ニツソちゃん  
わく(裏表紙)

感想などは  
#Platform通信欄

へぜひお寄せください！

To the next JOURNEY.

2023. 1. 1

*Our  
Journey  
Continues...*

*Platform*

Vol.3 混沌の中に